

Battleship Novels

〈BN-000〉

ペニンシュラの修羅外伝

Episode ZERO

— 3年前の敗戦 —

吉田親司

BN

Battleship Novels

ペニンシュラの修羅外伝

E P I S O D E Z E R O

— 3年前の敗戦 —

吉田 親司

1 国境の大会戦

— 1 —

— 2 —

— 3 —

2 隠謀の本陣

— 1 —

— 2 —

— 3 —

3 荒ぶる巨人

— 1 —

— 2 —

— 3 —

— 4 —

— 5 —

— 6 —

4 失意の英雄

— 1 —

— 2 —

— 3 —

— 4 —

ご注意

 奥付

1 国境の大会戦

— 1 —

霊峰マチネーの山麓には朝靄がたちこめていた。

草香るその中腹で守りにつくのはペニンシュラ王領軍近衛軍団の兵士たちだ。

彼らの表情はいずれも険しかった。

国王を死守する精鋭部隊だが、実戦経験がないのだ。訓練は十分に積んでいても、臨機応変が必要とされる異民族との戦いにおいて、どれだけ実力を発揮できるかは未知数であった。

初陣の恐怖と興奮で全身を硬直させる彼らだが、あまり長く待つ必要はなかった。

死の予兆を認識させる連絡が後陣から届いたのである。

上級波導修士兵と呼ばれる通信技師が、精霊の力を借りて受信した想波を翻訳し、機械的に読み上げたのだった。

『緊急警報。敵陣に動きあり。魔聴修士兵を覚醒させよ』

材木と鉄条網で拵えられた防御陣地が一斉に静まりかえった。

誰もがよく理解していた。これから行われる聴音儀式が失敗すれば、敗北へ、そして死へと一歩近づいてしまうと。

咳の音さえ聞こえない陣中で、すつく、と立ちあがった影があった。頭を覆っているフードを外すとスキンヘッドの若い男が現れた。

この異形の男こそが魔聴修士兵だ。

人生のすべてを聴力の鍛練のみに費やしてきた耳の達人である。その鼓膜は数メートル先の蝶々の羽音さえも聞き逃さないという。

髪を剃りあげたその頭部には合成樹脂でできた兜が装着されていた。首を保護するためのものではない。騒音を遮断し、内耳を守るための装備だ。

細い指が側面に触れると、留め金が外れ、バネの作用で兜はまっぴたつに割れた。それは頭の後ろで扇のように展開し、集音器の役目を果たす仕掛けになっている。

陣地は水を打ったように静まりかえった。聴音行動の間、物音を立てた者は死罪に処すと警告されているのだ。

守備兵は全員が息を殺した。咳の音さえ聞こえない。

魔聴修士兵は目を閉じたまま、数秒だけ外音を聞き、再び兜を閉じた。そして小さな声で

素早く呟いた。

「騎馬軍団が急速接近中。足音から推定される騎数は3000以上。我が防衛陣地まで、あと一五〇〇メートル」

報告を聞いた最前線指揮官のターガリオン・モイスは、どんな生意気な兵士でも服従させられる声で、こう命令した。

「総員、アルバレストを用意しろ。第2射法にて火矢を放つのだ」

意外すぎる命令に部下たちが視線を集中させる。

「先陣軍団長。第1射法ではなく、第2射法ですか!?!」

ういじん 初陣の少年兵が手持ちの アルバレスト 機械弓を握りしめたまま問いかけた。だがモイスは毅然とした態度を崩さない。

「そうだ。第2射法だ。弦を手で引いて矢をつがえろ。ぐずぐずするな」

罵声に近い命令に、兵士たちは行動を起こした。持参した兵器を地面に置くや、筒先に設けられたフックに足をひっかけ、矢をセットする。

かつて クロスボウ 十字弓とも呼ばれていた飛び道具には、その尾部に ウィンドラス 歯車式の巻き上げ機が用意されていた。兵士はそれで げん 弦を限界まで引っ張り、矢を放つ訓練を重ねてきた。

それが第1射法である。発射速度は遅くなるが、威力の小さい アルバレスト 機械弓で突撃してくる軍馬を制止するには最善の手段だった。

だが、モイスはここで第2射法を命じた。

ウィンドラス 巻き上げ機の力を借りず、腕と指のみで弦を絞る攻撃方法だ。

モイスは自分の選択に自信を持っていた。威力こそ落ちるが、第1射法よりも矢の発射速度は倍増する。数が多い騎馬隊を ほふ 屠るには、まずもって妥当な戦術といえよう。

しかも放つのは動物が嫌う火矢だ。四角い やじり 鏃の後ろには、魚油をたっぷりと染みこませた布が巻かれていた。

これならば馬も逃げよう。よけいな殺生は最低限ですむ。熱心なメルシュ教の信者でもあるモイスは、頭の隅で甘い考えを抱くのだった。

— 2 —

直後、^{りん} 燐が塗られた火打ち石がそこかしこで耳障りな音を奏でた。漁り火を思わせる紅蓮の光が陣地に並んだ。

攻撃準備完了。そう判断したモイスだが、再び大声で怒鳴る。

「まだ射るな！ ^{じゅうぶん} 充分にひきつけてからだぞ。なお第二次攻撃から火矢攻撃は中止。通常の弓矢に切り替えて連射せよ！」

実績から判断して ^{マジカルハルサネイション} 魔聴 修士兵 の報告は信頼できる。相手は3000の騎馬軍団に違いない。これが ^{せんべい} 尖兵 だろう。

ならば、まず第一波を ^{くじ} 挫く。 ^{はかいづち} 破壊鎚の役目を担う部隊が壊滅すれば、後続は勢いを失うこと必定である。

国境を突破してきたザルツランド帝国軍は、過去の実例を見るかぎりだが、数よりも装備に重きを置く傾向があった。そして先鋒にはいつも最強部隊を配備している。それを壊走させたなら、勝利はペニンシュラ王領のものとなるはずだ。

現在、山肌は紅葉で染められており、季節がら降雪も近い。国境の山岳地帯が純白の絨毯で覆われれば、軍隊の移動は不可能になる。

そうなれば春まで時間が稼げよう。防衛態勢を構築する余裕が生まれるはずだ。だからこそ敵軍を食い止めねばならない。

ペニンシュラ王領の興亡はこの一戦に懸かっている。モイスがあらためて阻止行動への決意を新たにした時であった。

重々しいノイズが聞こえた。

地面を小気味よく連打する獣の足音に相違ない。

あれこそが軍馬の響きだ。

そして——濃いミルクのような ^{もや} 靄をかきわけるようにして敵勢が現れた。

黒一色で構成された無気味な集団だ。遠方から見れば黒い奔流にも思えるそれは、横一文字の陣形で突っ込んできた。

「今だ！ 総員、放てェ！」

射撃開始を知らせる ^{ラッパ} 喇叭が高らかに鳴り響くと、^{プレトリア} 近衛軍団の兵士たちは任務を遂行した。

数千の ^{アルバレスト} 機械弓 の弦が鈍い不協和音を奏でた。燃えさかる火矢が天空へと射出され、放物線を描く。オレンジ色の物騒な光が、迫り来る敵軍へと降り注いでいく

だが、しかし——。

火矢が着弾しようとした直前、騎馬軍団から同じ色の何かが撃ち出された。

緋色の火の玉だ。

1つや2つではない。数百、いや数千以上の火弾が射出された。毒々しい小さな太陽は中空で爆裂するや、火矢の大半を瞬時に撃ち落としてしまった。

モリスは自分の目が信じられなかった。それらの火弾は、寄せる軍馬の口から吐き出されたものだったのだ。

肉薄する黒き^{しゅんめ}駿馬たちはまさしく異形の存在であった。その頭部にはたてがみはなく、かわりに^{つの}角が生えていた。耳まで裂けた口の中には^{きば}牙が幾重にも生え揃っている。純然たる哺乳類でないの是一目瞭然だった。

数は少ない。とても3000頭はいなかった。せいぜい半分といったところだろう。その割に足音だけはけたたましい。

まさか、^{マジカルハルサネイション}魔聴 ^{パッシブ・ヒヤリング} 修士兵 の ^{マジカルハルサネイション} 聴音行動 に誤りがあったのか？

いや、違う。

耳を鍛えることに人生のすべてを賭けてきた^{マジカルハルサネイション}魔聴 修士兵 にミスはなかった。相手が想定外の軍馬を揃えてやって来た。ただ、それだけの話であった。

すぐ側に陣取る少年兵が悲鳴のような声を出した。

「あれは……ドラゴン・スレイプニル！」

— 3 —

モリスもまた否定する材料を持たなかった。真一文字に並んで殺到する敵の馬は、8本の足を
持つ合成獣キメラニアンだったのだ。

魔聴マジカルハルサネイション 修士兵 はあくまでも足音から頭数を算出しただけだ。怪物が投入されたという事前情報など皆無だった。これでは間違えたとしても、誰が責められよう。

「ザルツランドの連中め。禁断の技術を使いおったか。総員抜刀だ！ 神の領域に土足で踏み込む新教徒を聖なる剣で切り捨てよ！ メルシュ教の本流は我らが旧教徒なり！」

そう怒鳴ったモリスは愛刀のファルシオンを抜いた。極端に幅が広い片刃の曲刀だ。

相手は呪われた神方術マジカルタオで誕生させられたドラゴン・スレイプニル。竜の頭と馬の胴体を持つ合成獣キメラニアンの肌は穿山甲センザンコウ以上に硬いと聞く。もはや弓矢で阻止はできまい。

そう判断した末の行動だった。8本足の妖馬は信じ難い速度で突き進んでくる。ここは肉弾をもって壁となり、本陣を守らなければ。

悲壮な決意を固めたモリスだったが、暴力の塊は速度を緩めずに防御陣地へとなだれこんできた。

再び魔物が火焰を吐く。炎は帯状に広がり、木製の障害物をあっさりと焼き払った。

悲鳴が陣地のあちこちからあがる。熱蒸気オープンにも匹敵する高温の真火まひを浴びせられた近衛軍団の戦意は、たちまち挫くじけてしまった。

「うわああッ！ もうだめだあ！」

隣の少年兵が絶叫するや、逃げだそうとした。モリスは先陣軍団長として役目を果たすべく、こう叫ぶ。

「止まれ！ 敵前逃亡は軍律違反だ。戻らぬのであれば味方といえども切り捨てるぞ！」

幸か不幸か、モリスは非情な命令を下さずにすんだ。敵弾が彼の代役を果たしてくれたのである。

少年兵の背中へと火弾が叩きつけられた。とたんに彼は、糸が切れた操り人形のように吹き飛ばされ、そのまま斜面に激突して動かなくなった。

「おのれ！」

部下を殺された現実と、責務を横取りされたという疎外感が、モリスの怒りを倍増させた。振り上げたファルシオンの輝きが空を切り裂く。狙うは敵の軍馬だ。

神話では天を駆けたとも伝えられるドラゴン・スレイプニルは、さすがに飛翔こそしなかったものの、並みの馬とは比較にならぬ跳躍ぶりを示した。大人の背丈ほどもある防御柵を軽々と飛び越え、モリスの頭上で舞ったのだ。
れっげく

しかし裂帛の気合いを込めて振るったモリスの剣が一步勝った。

充分な手応えを感じた直後、どさり、と肉塊が落ちてきた。それは魔の馬の蹄だ。黝い蹄鉄が奇妙な角度で地面に突き刺さり、切断面から鮮血が流れ落ちる。

その代償は高くついた。7本足となったそのドラゴン・スレイプニルは、なおも空中にとどまったまま、果敢に反撃を試みた。

強烈な蹴りがモリスの頭上から繰り出された。手を伸ばせば届く間合いからの一撃をかわすことはできなかった。

先陣軍団長はサーレット鉄兜をたたき割られ、気を失った。続いてドラゴン・スレイプニルは胸部へも打撃を加え、モリスの肋骨を破壊した。

指揮官を失った第一線防御陣地は、総崩れの様相を呈し始めたのである……。

2 隠謀の本陣

— 1 —

マチネー山の中腹に設営されたペニンシュラ王領軍本陣に敗報が届いたのは、それから数秒後のことであった。最前線で死の直前まで頑張っていた上級波導修士兵たちが^{ハイ・ワイヤーズ}想波^{ウェイブ}を飛ばし、状況を伝えてきたのだ。

それを受信した後陣軍団長補佐イトン・アンシャルは、ペニンシュラ王領の最高権力者に口頭で報告するのだった。

「国王陛下。第一陣が破られたもようです。どうかお引きください！ この本陣は我らが死守いたしますしょう」

ペニンシュラ王領の国家元首という地位にあるトマソン・ラガール2世は、戦場に持ち込ませた玉座に瘦せた体を乗せたまま、表情を変えずにこう告げたのだった。

「ここで余が逃げてどうなる。霊峰マチネーを抜かれたならば、首都オリエタスはがらあきになってしまうのではないか。あの街を失えば国体は維持できない。敗走してきた王など、臣民は愛すまい」

知らぬ者が耳にすれば責任感に溢れた台詞に聞こえるかもしれない。しかし、国王の本性を知るイトンは承知していた。

それが単なるパフォーマンスにすぎないと。

王自ら侵略軍を迎撃すべく、国境近くまで親征する。それ自体は称賛されてしかるべき行為だが、動機が不純すぎた。

ラガール2世は冷徹な政治家であり、己の支持率が低いことを熟知していた。八年前、実兄であった前王が急逝し、その後釜に座ったにすぎない男だ。地方都市の総督には、堂々と王の愚鈍さを批判する者さえいた。

ザルツランド帝国軍侵攻という国難に際し、ラガール2世は決断した。ここで存在感を十分に示し、国内の引き締めを図ろうと。

王も必死なのだろうが、それは虚勢であった。大して尊敬できない主君の指先が、わずかに震えているのをイトンは見逃さなかった。

しかし、曲がりなりにも軍勢の陣頭指揮を執る王は、なお為政者としての言葉を続ける。

「もっとも……愛されぬ王であっても生き残らなければならぬ。死を受け入れるのはたやすいこ

とだが、それでは民が野蛮人に蹂躪されようからな。

軍務のような^{さじ}瑣事は部下に一任したいのだが、前線を安心して任せられる将星がないのが、我がペニンシュラ王領の弱点であった。イトン・アンシャルよ。貴官があと10歳ほど^{としかさ}年嵩であったなら、余は全軍の指揮を委ねたであろうにな……」

王の指摘は事実であった。^{マジカルタオ}剣技と神方術に長けているイトンであったが、彼はまだ17歳の青年にすぎなかったのだ。

身分と世評は申し分ないとしても、部下は過半数が年上である。ペニンシュラ王領が国教としているメルシュ教は、妬みを罪過の一つとしているが、軍にも若さと才能を嫉妬する者は多くいた。前例をみても、^{はたち}二十歳以下の人間に軍団指揮権が委ねられたケースはない。

そして自分と祖国が置かれた状況を達観しているイトンは、国王がこちらに期待している台詞に思い至った。

この局面になっても、ラガール2世には虚勢を張る義務があるのだ……。

部下に督促され、しぶしぶ戦場を去ったという既成事実を欲している王に、イトンはこう進言したのである。

「国王陛下。御言葉はごもつともです。ここはやはり転進を。旗頭が^{たお}斃れば、軍が瓦解してしまうこと必定。場合によっては力尽くでも後退していただきます」

「ほう。ペニンシュラ王領の国家元首を脅迫するとは度胸が座っておるな。これが平時であるならば、いま打ち首にされても仕方なからう。

しかし、危急の際に有能な部下を斬首しても損のほうが大きい。熱意が空回りしたせいで思わず暴言を口走った。そう解釈しておいてやろうではないか」

ペニンシュラ王領の慣例上、君主が臣下から進言を受け入れる場合には、何度か固辞してから承諾する決まりになっている。王たる者が示すべき謙虚と熟考の証拠——そう考えられているのだ。

幕舎に詰める^{かんり}官吏たちの強張った顔には、もう一声という台詞が書いてあった。武官でない彼らは、国王さえ後退すれば行動をとにもできる。安全地帯への退避は、イトンの後押しに懸かっていた。

空気を読んだイトンが、不純な期待に応じようと口を開きかけたした時である。

幕舎に一陣の風が吹き込んだ。

^{まんまく}幔幕が持ち上げられ、背の高い将校が姿を見せた。^{キュイラッサー}甲冑の上からでも豊かな胸の脹らみ^{サーリット}がはっきりとわかる。目立つ緋色の^{エクルページユ}鉄兜を優雅な手つきで外すと、^{エクルページユ}垂麻色の長い髪が肩口にこぼれ落ちた。

「国王陛下に申し上げます。撤退なさる必要などございません。出撃許可さえ頂戴できれば、このエマルカが侵攻軍を撃ち破ってご覧にいれましょう」

— 2 —

不意に登場した女性戦士に向き直ったラガール2世は、品定めするかのような視線で彼女を見据えると、こう話しかけた。

「後陣軍団長エマルカ・ダークナスよ。勝利を確信した理由を ^{かいちん}開陳したまえ。もし貴官の強弁が根拠なき自信に基づくものであれば、我が姪といえども容赦はできぬぞ」

王の言葉に嘘はなかった。ここに登場したエマルカは、ラガール2世の兄であった前王ランドハル・ダークナスの忘れ形見なのだ。

そしてラガール2世と彼女の仲はお世辞にもよくない。

前王の遺言により、王位継承権はエマルカが筆頭になっていたが、国王は実子であるミノン王子を跡継ぎにしようと目論んでいたのである。

ミノンはまだ5歳と幼く、また周囲からの反対も強かったため、ラガール2世も後継者指名は保留していたのだが、内心エマルカの存在をうとましく感じているのも事実だ。

また前王が崩御したのは、公式には病死と発表されているが、毒殺説も根強くささやかれている。

黒幕はやはりラガール2世だろうと噂されていた。物的証拠こそなかったものの、いちばん得をした男が関与しているのは半ば公然の秘密であった。酒宴の席のことだが、ラガール2世自身が自慢げに王位篡奪を口にしていたという未確認情報もある。真偽はともあれ、エマルカとの関係がこじれたとしても仕方のない情況だ。

イートンは素早く思考を走らせた。ここでエマルカが孤立するようでは、たとえ勝利を得たとしても後が面倒になる。

子供の頃から学友であり、敬慕の対象でもある美姫 ^{びき}を守るべく、イートンは口を開いた。「後陣軍団長。敵を過大評価しすぎることが感心されぬように、相手を最初から呑んでかかることもまた褒められた行為ではないかと愚考いたします。

未確認ながら、ザルツランド軍の先鋒はドラゴン・スレイプニルで編成された突撃騎馬集団 ^{すべ}だとの情報もあるのです。それが本当なら、我らに抗う術は ^{すべ}ありません」

予期されるエマルカへの圧力を弱めようとしての発言だったが、イートンよりも頭一つ背の高い彼女は、自信ありげな口調を崩さなかった。

「この目で敵状を確かめてきた。イートンの言うとおりに、敵の先鋒はドラゴン・スレイプニルの集団だ。だが、抗う術なしとは言葉がすぎよう。『悪夢の過去より舞い戻りし魔女、という私の異名を忘れたのか？』

ラガール2世が間に割って入った。

「貴公たちの言葉を信じてよいものだろうか。ドラゴン・スレイプニルの価格は高いのだぞ。一頭あたりの相場は約350万ローザもする。通常の軍馬なら五〇頭は楽に買える学だ。経済破綻がいちじるしいザルツランドにそんな金などあるまい」

戦士としての勇氣、賢者としての知性、そして政治家としての冷酷さを父親から受け継いでいるエマルカは、凜とした声で回答した。

「後ろ盾がついたと考えるべきでしょう。ザルツランド帝国の背後には軍資金の提供者がいるのです。国王陛下にはお心当たりがあるのでは？」

苦虫をまとめて噛み潰したような表情をしてからラガール2世は言う。

「……そういうことか。神聖メガロード連邦が軍資金を融通しているのだな。ベルリーノ公会議で多数派になれなかった新教徒どもは、正統派たる旧教徒の我らを根絶やしにする気らしい。ダイバの奴め。国債を買い支えてやった恩も忘れおって……」

エマルカは早口で言った。

「平時における外交の失策を悔やんでも、有事の今は無益です。ここは眼前の危機を取り除くのが先決。御命令を戴けないのであれば、私は独断で職責を果たしたく存じます」

「生意気すぎる発言だな。お前は私同様、メルシュ教の信徒ではないか。それも最強に教義の厳しい聖ダルガ武闘修道院で洗礼を受けた身なのだぞ。できるかぎりの殺生を禁じられている身でありながら、どうやって敵を撃破するというのだ？」

そう言った王は幕舎の一角に視線を投げた。そこには人鳥^{ペンギン}を連想させる風変わりな人物の姿があった。白と黒の僧衣に身を包んでいるのは妙齡の従軍尼僧^{バトルナン}だ。

「シスター・カレン。どうかかつての愛弟子^{ゆうえき}に誘掖^{ゆうえき}を願いたい。敵軍を傷つけずに戦勝を得ようと欲する欲張りに、その困難さを説いてはくれまいか」

— 3 —

年齢不詳の聖職者は、十数秒の沈黙ののち、重い口を開いた。

「国王陛下は我らの教義を曲解なさっておいでのお様子。メルシュの教えは、いたずらに理想を追い求めるばかりではありません。現実のすり合わせにも長けております。命を奪うことは許されずとも、無法の輩を誅することは奨励されているのです」

カレンと呼ばれた高僧は、女性らしからぬ太い二の腕^にを振りあげると、鋭い目線をかつての弟子へと向けた。

「エマルカよ。あなたがこれから行う罪を前もって赦^{ゆる}します。異端者を存分に懲らしめてくるのです」

教理と武術の大師匠にお墨付きをもらったエマルカは、儀礼をもってカレンに応えた。

「慈悲は時として凶器にもなる。かつてシスター・カレンから痛みと共に叩き込まれた真実を私は片時^{かたとき}も忘れておりませぬ」

その顔は空恐^{そらおそ}ろしいまでに無表情であった。女達の凄みのあるやりとりを耳にしたラガール2世は、もはや承諾するしかなかった。

「わかった。侵略者を討ち果たして来るがよい。全兵士の指揮権をお前にゆだねよう」

「いいえ。私の親衛隊だけで結構です。国王陛下の守りを手薄にするのは愚策ですし、あんな連中など一人で充分ですから」

きびすを返したエマルカの背中^はは、見る者に爽快感さえ与えた。王に一礼して退出の許可を得たイトンは、戦場には不釣り合いなまでに醇美^{じゅんび}な上官の後を追う。

「後陣軍団長。どうか無茶はおやめください。あの合成^{キメラニアン}獣の群れに単騎で飛び込むなど、正気とは思えません」

振り返りもせずにエマルカは男言葉で返答したのだった。

「私は無為無策で敵軍に向かうほど暗愚ではない。勝算があるからこそ大見得を切ったのだ。あれを見るがよい」

エマルカは片手で幕舎の横を指した。手首を保護する^{ガントレット}籠手^のの先には、凱旋式でたまに見かける^{バランクイン}戦場輿^が準備されていた。

ただし豪華な椅子はない。代わりに奇妙な異物が据えられている。壺を細長くし、横倒しにしたような銀色の物体だ。精霊^{スピリッツ}の加護を受けているらしく、色とりどりの灯りが小さく点滅していた。

「まさか.....あれを使う気ですか。古^{いにしえ}の発掘^{はっくつ}兵器を!？」

「他に方法があるのなら教えて欲しい。失われた先史文明の遺産を見つけ出したのだ。過去から

の贈り物を活用しないのは、メルシュの神の御意志に反する行為だな」

「満足に試射もしていないでしょう！」

「実戦で効果を確かめればよいだけの話ではないか。とはいえ危険なのは事実だから、お前も下がっている」

「危険を承知ならば、他の者に操作を任せるべきです！」

「扱えるのは私だけなのだよ。それに今回の国難で戦果を勝ち取らなければ、王は私を後継者から外してしまう。

祖国の行く末を案じる者として断言する。ラガール2世の治世が続けばペニンシュラ王領はあと10年と持つまい。叔父上はすべての問題が銭勘定で片づくと考えている俗物だからな。

危機を回避するには、現実を直視して対策を準備できる者が国王の位に就くしかない。そのためには敵軍を討ち果たしたという実績が必要なのだ」

「御名を世間に存在を高らしめるための突撃ですか。賛同できません。それで落命されれば、世間の笑いものですよ」

「祖国が滅び行く姿を見るくらいであれば、この身を焼き尽くすほうを選びたいものだな」

「せめて護衛に魔導重装擲弾兵をお連れください。鈍足部隊ですが、空間障壁術の技にたけております。弓矢や小銃弾ならば防げましょう」

「断る。身軽なほうが望ましいし、手柄を独り占めできないのは嬉しくない」

幼少時から学友として一緒に成長してきたイートンにはわかった。エマルカは意固地になると助言に耳を貸さなくなってしまうのだ。こればかりは麗しく成長した今でもいっこうに変化はない。

「それでは身軽な私が同行し、補佐役としての責務を果たしましょう。どうか守りを固めよと御命令を！」

儂げな表情を見せてから、エマルカは言った。

「それはいけない。私はいずれは国政をあずかる身なのだ。過度な献身を部下に求めては冷酷な指導者だと国民に批判されよう。

賢聖騎士イートン・アンシャル。私はお前に左腕という負債を押しつけてしまった。それ以上のものを求めてはなるまいよ。そもそも愛する部下を楯にするのは飽きた。

あ、いや……愛するというのは庇護の念に近い感覚の発露にすぎないのだから、誤解してはだめ……ではなくて、けっして誤解してはならぬぞ」

朝霧のように白い美姫の頬には、ほんの少しだけ赤みがさしていた。それを認めたイートンは思わず昔の呼び名で語りかけるのだった。

「エマ……あの時のことならば、もう気かけずともよいと何度も言ったはず。この腕一本で君との距離が詰まったのであれば、代価としては安すぎる」

ふと足を止めたエマルカは、深呼吸をしてから流れるような口調で話した。

「その名で私を呼ぶのは10年前に禁じたはずだ。エマという愛称は過去に置いてきた。以後は後陣軍団長と呼ぶように。

本来なら厳罰に処すところだが、出撃直前の段階でそれなりに有能な部下を斬首しても、損が大きいだろう。熱意が空回りし、暴言を口走った。そう解釈してやるから感謝するがよい」

ラガール2世のそれをまねた叱責を舌に乗せたあと、エマルカは意地の悪い微笑みと一緒に続けた。

「しかし無罪放免というわけにはいかないな。罰として命懸けの任務を与えよう。突破された最前線に赴き、部隊を再編制せよ。私が敵軍を潰乱させるから、その背後を衝くがよい。殲滅できれば、手柄はお前のものになろう」

「ご命令に従いたいところですが、とても無理かと。早馬でも前線にたどり着くまでは時間を要しましょう。常道ではまず間に合いません」

「では鬼道を征くがよい」

そう告げたエマルカは、吟遊詩人のそれを思わせるまでに細い指をイートンに向けた。銀色に光る指輪から帯状の光が伸び、彼の足を照らす。

同時に淀みない声で魔術詠唱が始まった。

「骨格と筋肉と血液を支配する^{マジカ・アリア}精霊^{スピリッツ}グーリゲンに告ぐ。この者を疾風よりも、また稲妻よりも早く走らせたまえ。もし落命したとしても、誰も恨みはせぬゆえに……」

勝手に命を^{まないた}俎板^{すべ}にのせられたこっちとしては、大いに恨むしかないが、逆らう術などない。エマルカの魔力に抗える者など、エウローパ大陸全土を捜してもいないのだから。

イートンは異変に気づいた。自分の足が意志に反して動き始めていた。それも常軌を逸した勢いで。

歩幅は駆け足の数倍になった。股が裂けそうで痛い。速度も野生化した^{ドラゴン}暴竜の急降下なみだ。異議を唱えようにも、空気が壁となって顔面に押し寄せ、もはや満足に息すらできない。

背中にエマルカの声が響いてきた。

「腹式呼吸をすれば意識は持つ。そうしなければ5分で窒息してしまうぞ！」

3 荒ぶる巨人

— 1 —

ほんば
奔馬の勢いで最前線へと駆けていったイトン・アンシャルの背中を見ながら、エマルカは安堵していた。

これでいいと。我が身が修羅となる瞬間など、とても好きな男に見せられるものではないのだからと。

いまから展開される光景は地獄そのものだ。人を殺め、人を傷つけることを禁句とするメルシユ教の教えに背かねばならない。いくら人鳥ババアことシスター・カレンの赦しが得られたとはいえ、大いなる自己欺瞞の道へと邁進しなければならないのは、この私なのだ。

嫌な思い出が甦ってきた。かつてエマルカは教義に反し、イトンの肉体に傷を負わせた過去があった。

あの時の廉恥と後悔は永遠に忘れることはできまい。そしてこれから悪しき過去を拡大し、再現しなければならない。

(……過酷な現実に向かう責務は私ひとりで充分だ。これ以上、イトンを傷つけたくはないからな。賢聖騎士としては最上級の部類に入るが、あの男は繊細すぎる。哀感は人を成長させるが、その前に壊れてしまうようでは意味がない……)

幸いにして思い煩う時間はわずかですんだ。護衛が危機の到来を叫んだのだ。

「殿下！ 敵の先鋒が来ます。あと800メートル！」

身長割に身軽なエマルカは、兵卒がかつぐ戦場輿にひらりと飛び乗り、裾野を凝視した。

見えた。黒褐色の波が急速接近中だ。

押し寄せる敵勢の陣形は見事なものだった。幅は薄く、横に長いそれは、こちらの本陣を包囲する覚悟の表明に違いない。

くわえてドラゴン・スレイプニルは気性が荒い獣である。それをあそこまで使いこなすとは、かなり以前から侵攻の準備に着手していたのだろう。

防衛陣を突破したザルツランド帝国軍は圧倒的な勢いだが、自信家のエマルカは恐怖を感じなかった。合成獣には合成獣ならではの弱点がある。それを衝くつもりだった。

敵が600メートルに接近するまで深呼吸を続け、そして彼女は魔術詠唱を始める。

「……熱波と冷気を支配する精霊アウレメンツよ。見るがよい。不作法を極める無粋な馬の群

れを。そして知るがよい。奴らが世の「理」を乱している現実を。

調和と旨とする汝には凶馬を止める義務があろう。座視すれば汝の名は軽んじられ、人口に膾炙かいしやされることもなくなろう。

よってわれが力を貸す。この発掘兵器「フリーザーレイ底冷えの光輪」、で汝の御業みわざを強化し、ここに鼓吹こすいするがよい！」

エマルカの声で旧文明の遺物に息吹がふき込まれた。大筒に似た物体の先端が無気味に輝き、空中に蒼白い光が生まれた。

彼女が後方に回ると同時に放射が開始された。蒼白かった光は虹を思わせる色と形に変化し、敵軍へと突き進んでいく。

数十秒後、それは荒ぶるドラゴン・スレイプニルの先頭集団と接触した。

竜の頭と八本の足を持つ異形いぎょうの悍馬かんばから、この世のものとは思われぬ絶叫がほとぼしった。混乱した彼らは、狙いも定めずに無差別に炎を吐き出し、すぐに同士討ちが始まった。

乗馬していた竜騎兵たちも無事ではすまなかった。ある者は鞍から振り落とされ、ある者は自らの愛馬が発する熱の息に焼かれていく。

太古の昔に開発され、そして封印された典型的な時代錯誤遺物オーパーツが、その真価を発揮したのである――。

— 2 —

ペニンシュラ王領の各地から出土する発掘兵器だが、その大部分が駆動理論すら解明されておらず、たいていは骨董品としての価値しか持っていない。

もっとも後先を考えなければ動かせる遺物もある。エマルカが発射した底冷えの光輪もまたそうした代物だった。

底冷えの光輪は一種の冷凍光線である。着弾と同時に細胞内の水分を一気に凝結させ、活動を停止させる恐るべき兵器だ。

一定の波長の光を気体分子に叩きつけ、その原子の重心運動を低下させることにより、温度を奪う仕組みだが、エマルカがそれを理解していたわけではない。ただ発射できるという一点を確かめたのち、独断で戦場投入を決定したのだった。

状態は万全ではない。すでに試射で欠陥も指摘されていた。

氷点下に追いやれる範囲が狭いのだ。旧文明人はこれを複数台準備し、数で敵軍を一網打尽にしていたらしい。威力を落とせば広範囲に影響を及ぼせるが、当然ながら効果は薄くなる。致命傷は与えられまい。

だが、エマルカはこれを弱点とは考えず、逆に好都合と捉えた。

命を奪えぬメルシュの教えに背かず、敵を無力化できるとすれば、これほど素晴らしい兵器もあるまい――。

襲いかかってきたドラゴン・スレイプニルは、誕生前から人の手が加えられており、画一化されすぎた生命体であるといえた。

まるで鑄型から取り出したかのように、その体躯は同じなのだ。これまたエマルカにとって好都合であった。

薄い带状に展開した底冷えの光輪の輝きは、軍馬の頭部を撫で切りにしたのである。

凍りつかせたのはその両眼であった。視力を失ったドラゴン・スレイプニルの群れは、一瞬で大混乱に陥った。

「効果絶大と認む！ 第二波を放つがよい！」

エマルカは叫んだが、その必要も薄かった。敵の騎馬軍団は早くも崩壊しつつあったのだ。

イートンが前線部隊を呼び戻せば、残敵掃討は完了することだろう――。

— 3 —

その五分前——。

無残に突破された最前線にイートンは到着していた。

エマルカの^{マジカ・アリア}魔術詠唱で爆発的な活動を開始した^{スピリッツ}精霊グーリゲンだが、目的地到着と同時に力を失うよう、小細工がなされていたらしい。

(……さすがはエマだ。私も^{スピリッツ}精霊を飼い慣らすことは得意としているが、ここまでの^{さしかげん}匙加減は無理だろう。

あの発掘兵器もまた然り。^{スピリッツ}精霊の力を借りれば私でも起動はできよう。しかし微妙な調整は至難の業だ。そんな芸当ができるのはやはり彼女くらいだ……)

過呼吸を続ける鼻孔に嫌な匂いが入ってきた。焼け焦げた戦死者たちが発する異臭だ。ドラゴン・スレイプニルの火炎弾にやられたのだろう。

素早く被害状況を確認したイートンは、斃れた者の数が意外に少ないことに気づいた。無傷の兵士も大勢いる。

ただし指揮系統が分断されたため、彼らは^{うごう しゅう}烏合の衆になり果てていた。責任回避にばかり^{きゅうきゅう}汲々とし、命令がない限りなにもしないのは、上層部に権力が集中しすぎた組織の悪い特徴である。追い打ちをかけるには指揮官が必要だ。

荒れ狂う心臓の鼓動を整える暇も惜しみ、彼は怒鳴る。

「指揮官はどこにいる！ 先陣軍団長ターガリオン・モイス殿はいずこに！」

反応したのは^{マジカルハルサネイション}スキンヘッドの魔聴修士兵だった。合成樹脂の兜で聴覚を封印しているが、こちらの唇の動きを読んだらしい。彼はイートンの袖を引き、こちらですと案内した。

野戦病院はそれほど離れていない場所にあった。地面に負傷者が無造作に並べられており、軍医が助けられる者とそうでない者を^{しゅんべつ}峻別している。

イートンは見知った顔を探し、すぐに見つけた。

ターガリオン・モイスだ。5歳年上の堅物であり、^{マジカルタオ}神方術の心得こそないが、剣を握らせればイートンと互角かそれ以上の腕前だった。

そんな勇者が無残な姿のまま横たえられていた。治療中ではない。放置されているのだ。

軍医を捕まえたイートンは語気を荒げた。

「本陣が^{ひん}危機に瀕している。先陣軍団長の力が必要だ。早く治療を！」

しかし軍医の返事は重苦しかった。

「彼はもうだめです。^{ろっこつ}肋骨が折れて肺に突き刺さっていますし、心臓も停止しました。遺体の蘇生は私の仕事じゃありませんから」

「ええい！ ならば私がやる！」

そう言った彼は、乱雑に包帯が巻かれたモリスの胸に片手を押し当て、^{マジカ・アリア}魔術詠唱を開始したのだった

「.....骨格と筋肉と血液を差配する^{スピリッツ}精霊 ニトローリンよ。この者の心臓をいま一度だけ動かしたまえ。本来、授けられるべきであった余命をこの者に授けたまえ。非情の世を正し、ニトローリンの御名を高らしめたまえ.....」

エマルカが^{オフェンス}攻勢魔術を得意としているのに対し、イートンは^{ディフェンス}防御魔術に秀でていた。それも^{メディカルマジ}治療術においては他の追随を許さない腕前だった。

指先が緑色に輝き、それが先陣軍団長の胸に移った。そして電光が生じた。

ターガリオン・モイスは全身を^{けいれん}痙攣させると、やがて目を見開いた。そして半身を起こすや、口と鼻から派手に吐血した。

軍医があわてて駆け寄ろうとしたが、イートンはそれを制して言った。

「肺にたまっていた血が抜けただけだ。止血は^{スピリッツ}精霊 がやってくれた。これで動ける」

眼前で起こった奇跡に、軍医は目をまるくした。

「これはまさか.....禁断の^{カムバック}蘇生術！」

「いや、違う。それは使える者などいない最高位の魔術ではないか。私は心臓に電撃を与えて再起動させ、痛覚を麻痺させ、肺を掃除しただけにすぎない。命を取り戻せたのはモイス殿の生きる意志によるところが大きい」

ひとしきり咳き込んだあと、モイスは切れ切れに言葉を発した。

「煉獄を.....見た気がする。死の淵から.....蘇ったような気分だな。まずは水と.....食べ物と...
...酒をよこせ.....」

その背中を軽く叩きながら、イートンは返す。

「モイス殿。私がいま用意できるのは汚名返上の機会だけなのだ。応急処置だが、傷は癒えたはず。どうか復讐戦の指揮を執って戴きたい」

「おお、賢^{マジステルエクセス}聖騎士イートンではないか。ならばここは^{よみ}黄泉ではあるまい。あの世ならば貴殿がいるわけがない」

「不幸にしてまだ我らは^{うつしよ}現世にいる。そしてメルシュ教の教えに反し、まだ殺生をしなければならぬようだ」

「しまった！ 敵軍が本陣へ向かったか！ 俺が阻止に失敗したばかりに.....」

「まだ巻き返しはできます。エマルカ様がお一人でザルツランドの軍勢を食い止めておられるのです。貴殿は先陣を再編制し、背後から追撃を指揮していただきたい」

ここで疑念を挟まないのがモイスの長所であった。およそ信じ難い状況だが、嘘や冗談を口にしていられるような状況ではない。そう判断し、行動できる軍人であるからこそ、栄えある先陣軍団長に任命されていたのだ。

モイスは活力を吹き込まれたかのように立ち上がると、大声で言った。数分前まで死にかけていた男とは思えないほど壮健な声だった。

「あの『悪夢の過去より舞い戻りし魔女、が単独で？ こいつは驚きだ。しかし、どんな術を使おうとも、女一人で長くは持つまい。」

皆の者！ 3分で隊列を組み直せ！

これより本陣前面へと突撃を敢行する。後陣軍団長エマルカ・ダークナス殿が戦っておられるのだ。我らは敵を背後から襲撃し、これを蹴散らす！ 以上！」

有無を言わさぬ命令に敗残兵たちは戦意を取り戻した。地面に落とした剣をもういちど握りしめ、先頭を切って走り始めたモイスの背中を追いかけていく。

兵士たちが奏でる軍靴の音を聞いたイトンは、これで責務の半分を終えたと思った。

あとは自分も前線へ舞い戻り、エマルカを救わねば。それも ^{できるだけ} 可及的すみやかに。

^{スピリッツ} 精霊 グーリゲンの力を拝借すべきだろうが、^{マジカ・アリア} 魔術詠唱の効能はとっくに切れている。また心臓にこれ以上の過負荷はかけたくなかった。

前線に急行できる足はないか？ 早馬は生き残っていないか？

周囲を見回したイトンは、奇怪な生命体が ^{うずくま} 蹲っているのを見つけた。

ドラゴン・スレイプニルだ。

竜の頭と馬の体を併せ持つ ^{キメラニアン} 合成獣は、健常であれば8本の足を持っている。だが、悲しげな瞳でこちらを見つめている雌馬は、負傷したらしく、後ろ足を1本失っていた。

ザルツランドの民は過激なまでの個別優性主義者であり、傷物を嫌う。まだまだ走れる馬であっても、^{ディフォーミティ} 『半端物』になってしまえば、あっさり放棄してしまうくらいだ。

気に障る単語を思い出してしまったイトンだが、同時に親近感をも感じた。上手に隠してはいたが、彼もまた過去のあやまちにより、五体満足ではなかったのである……。

彼は傷ついたドラゴン・スレイプニルの側によると、威厳のある調子で言った。

「貴様の主人は戦死したのか？ それとも負傷した貴様を捨てたのか？ いずれにせよ孤独な魂が透けて見える」

ドラゴン・スレイプニルはあるていど人語を解する。彼女はライオンでさえ噛み殺せる牙を隠したまま、無表情にイトンを見据えていた。

まるで品定めでもするかのように。

「よろしい。ならば私が新たな主人となってやろう。私は傷ついた貴様を特別扱いはしない。だから貴様も甘えを見せず、卑屈にならず、持てる力のすべてを私に貸せ」

イトンは気前よく代価を前払いした。彼は口早に ^{マジカ・アリア} 魔術詠唱をすませた。 ^{メディカルマジ} 治療術としての技倆を発揮するために。

「…… ^{スピリッツ} 精霊 プレートレットよ。この哀れなる獣を助けたまえ。その出血を止めたまえ。汝の慈悲深さを示すまたとない機会を逃したもうな……」

たいていの ^{スピリッツ} 精霊 は人間よりも獣とのほうがの相性がよい。呪文の効果は抜群だった。切断された足首から流れ出ていた血液は数秒で凝固し、傷口はふさがっていく。

そのドラゴン・スレイプニルは驚いたらしく、目玉を大きく見開いた。意外にも表情は豊かな様子だ。

イートンは素早くその背中に跨がる。幸いにして鞍も^{ウヰ} 鐙も^{ウヰ} 無事だったため、乗り越やすのにも不自由はない。

「最初の命令だ。南へ走るのだ」

ドラゴン・スレイプニルは闊歩を始めた。すぐ駆け足に移る。7本足になってしまったとはいえ、普通の馬とは比較にならない勢いだった。

これなら本陣まで数分で行ける。そう判断したイートンの脳裏に違和感が走った。

^{ウェイブ} 想波を受信したのである。

^{マジステルエクテス} 賢聖騎士を名乗るためには^{ハイ・ワイヤーズ} 上級波導修士兵と同等の能力が求められる。イートンは遠距離同方向会話の技術も身につけていた。

『後陣軍団長補佐はどこで油を売っているのだ！』

トマソン・ラガール2世だった。

『大至急本陣へ戻れ！ これは命令である！』

国王自身が^{ウェイブ} 想波を送ってきたわけではない。^{ハイ・ワイヤーズ} 上級波導修士兵の耳を経由して肉声が送られて来たようだ。

それもイートン本人にしか届かない専用秘匿回線が使われている。音質も明瞭だ。送信者にはかなりの負荷が課せられているに違いない。

「こちらイートン。感度は極めて良好。どうか以後は出力を下げられたし。^{ハイ・ワイヤーズ} 上級波導修士兵が死んでしまいますぞ」

相手は音量を一切気にせずに怒鳴り続ける。

『細かいことを気にしている場合か！ 本陣が破られかけている！』

「まさか。エマルカ様が敵軍の阻止に失敗したのですか」

『いや。姪はよくやった。しかし相手が一枚上手だった。混乱したザルツランド軍にとどめを刺すべく、本陣から部隊を前進させたのだが、それが裏目に出た』

馬鹿な。自ら望んで防御を薄くするなど、国王は血迷われたか。

『背後から別の敵が現れたのだ。夜陰と濃霧に乗じて接近したのだろうが、これは発見できなかった見張りの責任だ！』

「新手の敵軍の規模はどのくらいです？」

十数秒の沈黙のあと、声が割れ鐘となって響いてきた。

『一人だ』

最悪の予感を抱くイートンに、王は想像どおりの返事を投げつけてきたのだった。

『相手は^{モノアイ} キュクロプスだ。単眼の巨人なのだ。^{プレトリア} 近衛軍団選抜の神聖護衛隊が次々にやられている。余はブンドラン市まで引くぞ。あの城塞で体勢を立て直す。

頼む。あれを足止めしてくれ。もしも始末できたなら恩賞は思いのままだ。もし欲するのであればエマルカをくれてやってもよい！』

それはラガール2世が苦し紛れに言い放った口約束だった。

賢明なイートンは、頭の片隅でそれを理解していたが、同時に信じたくてたまらない欲望を押

し殺すことはできなかった。

つまり嘘でもいいから信じたかったのだ。

「了解しました。これより本陣に取って返し、怪物を討ち果たしてご覧にいきましょう。成功の
あかつき 暁 ゆめゆめ には褒賞を 努々 お忘れなきように願います！」

子供の時分から憧れていた対象に、ひよっとすると指の先が届くかもしれない。その一念が靴底に伝播し、ドラゴン・スレイプニルの腹を強く蹴った。

7本足の魔の馬は、加速命令に反応し、南へと疾走していった――。

— 4 —

本陣から突撃を意味するとき鬨の音が聞こえた瞬間、エマルカは戦況を悟った。

叔父上がまた余計な色気を出したと。

(……危険はこちらに押しつけ、手柄だけを独占する気か。最前線に姿を現した以上、手ぶらではオリエタスに帰れぬのだろうが、戦えなくなった敵軍を始末したところで大した自慢にはならぬのに……)

自制心を限界まで活用し、その台詞を口に出すことだけは思いとどまったが、現実には彼女が想像する方向へと転がりつつあった。

一瞬にして戦力を喪失したドラゴン・スレイプニルの集団へと、本陣が繰り出した増援部隊が襲いかかる。

底冷えのフリーザーレイ光輪の射程外に逃れ、かろうじて視力を失わなかったキメラニアン合成獣が火を噴いたが、現場に到着したマジカルグレナディア魔導重装擲弾兵がターミナルバリア空間障壁術を張り巡らせたため、こちらに被害らしい被害はない。逆にランチェーレ重装槍騎兵がなだれ込み、弱体化したザルツランド軍に痛打を加えている。

兵士は全員がメルシュ教の信徒だが、熱烈な信仰心は持ち合わせていない。せっしょう殺生を戒める教えなど、敵を前にすれば頭から消し飛んでしまう。

殺戮が開始された。手柄を欲する兵士たちが野獣のように刀剣を振ると、血飛沫と肉片が飛び散り、霊峰の山肌を汚していく。

あまりにも凄惨な風景だった。それを直視したエマルカは胸に片手をあてた。首から提げているクロスピース数珠十字の感触が甲冑ごしに伝わってくる。勝利の代価として敵に強要した犠牲の弔いは聖職者としての義務だろう。

覇者として贖罪を欲したエマルカだが、それは傲慢なる思い上がりにはすぎなかった。直後、彼女はそれを痛感させられることになる。

後方の本陣から悲鳴が聞こえたのだ。

まさか敵襲？ いつの間に回られたのだ？

きっと夜半だろう。少数のゆうよくたい遊弋隊なら、闇に紛れて浸透攻撃をしかけることも可能だ。霧はいつも防御側に味方するとは限らないのだから。

いぶか訝しみながら振り返ると、無気味な人影が蠢いているのが見えた。

両手両足が揃っている点は人間らしいが、逆に言えばヒトとしての条件を満たしているのはそのくらいだった。

まず巨大すぎた。屈強な戦士の2倍、いや3倍はあるだろう。正確に身長がわからないのは相手が四つ足で駆けているからだ。

体軀を支える両腕はゴーレムなみに太く、また異様に長い。立った状態でだらりと下げれば膝まで楽に届く。

足も同様に肉太だが、こちらは短い。あまった^{もも}腿の肉が臀部に何重にも覆い被さっている。これで馬と同等かそれ以上の体重を支えていた。

そして身につけている防具は^{ブリガンダイン}鎧止 鎧 だけだ。右手に握っているのは刃のない^{クラブ}棍棒だが、樹齡数百年の丸太を削りだしたかのように巨大だった。

いちばん恐ろしげなのは面構えだった。口と鼻と耳は常人と同等だが、その瞳は不釣り合いなまでに大きかった。伸びすぎた黒髪が顔面の数割を覆っているので断言はできないが、眼球は一つしかないようにも思えた。

「キュプロース！」

最悪にして唯一の可能性に行き着いたエマルカであった。

^{モノアイ} ^{ジャイアント} 単眼の巨人兵は彼女の声に気づいたのか、もの悲しさを携えた視線をこちらへと向けると、絞り出すような唸り声を発した。

「あるうううう……あるうううう……」

— 5 —

さながら地獄から響いてくるかのような咆哮であった。強敵はエマルカのほうへ向き直ると、地響きを奏でながら歩を進めてきた。

手にした棍棒が振り回される。その先端に触れた兵士たちは、叫ぶことさえ許されずに倒れていく。

神聖護衛隊が巨人の背後に接近し、^{アルバレスト}機械弓を連続発射した。

その大半が相手の背中へと命中していく。

しかし、巨人は蚊に刺されたほどの痛痒感しか覚えなかったようだ。その動きが鈍る気配はまったくない。

^{スバタ}太刀剣を抜いた兵士が5人ごとの組で殺到し、あらん限りの力で敵の四肢に打ち付けるが、それも無意味であった。^{やいば}刃は素肌をさらした相手の手足を痛打したものの、血は一滴も流れない。

はっとするエマルカだった。巨人の皮膚が尋常でないと気づいたのだ。

「……全身に高熱を走らせて、筋肉を硬化させる仕掛けだわ。無茶なことを。あれでは余命を年単位で削り取ってしまう……」

あらゆる武器が通用しないという悪夢めいた状況に、兵は算を乱した。巨人は太く短い指を伸ばすと、鈍足の若者をつまみあげる。

その後の光景は脳が理解を拒絶するものだった。^{てのひら}掌が触れた瞬間、逃げ遅れた不運な兵士は^{たいまつ}松明のように燃え上がってしまったのだ。

食人というおぞましき風習とは無縁らしいのが、せめてもの慰めだった。巨人は、見栄えのしない玩具に飽きた子供のように、戦士の死骸を放り投げた。

それは悪意も道徳も存在しない純粋な破壊兵器なのだろうか？

違って欲しい。エマルカはそう思った。この怪人は悲しげな瞳をしている。きっと他に己を生かす道を与えられず、暴力に逃げ場を見つけ出したのであろう。

ならば今ここで苦痛を断ってやるのが聖職者としての慈悲！

エマルカは腰から^{うずら}鶉の卵のような物体を取り出すと、^{マジカ・アリア}魔術詠唱に移った。

「……^{スピリッツ}精霊 アウレメンツにもういちど希求する。迫り来る異形の輩は体熱を^{もてあそ}弄ぶ者なり。これぞ汝への冒瀆に他ならずして何ぞや。

火には火を。熱には熱を。理不尽な法力に頼る者を焼き尽くし、功德を与えたまえ！」

彼女が握りしめていたのは魔術処理が施された^{グレネイド}投石弾だ。これを^{スリング}投擲紐に挟み込み、頭上で回転させて投げ飛ばせば、驚くほどの飛距離と精度が期待できる。

急接近するキュプロースへと一弾を放ったエマルカは、それが相手の胸元で炸裂するのを目

撃した。

朱と碧が融合した色合いの火花が散った。すぐさま炎が巨人の全身を覆う。胴体から四肢にかけて走った火焰に、さすがの巨人も絶叫を發した。

「あるうううう……あるうううう……」

ペニンシュラ王領軍の兵たちは規律と戦意を取り戻し、四つん這いのまま動きを止めたキュプロースを取り囲んだ。

「エマルカ様がやったぞ！　さすがは後陣軍団長だ！」

「怪物め。そのまま火葬してやる。骨は拾ってやるから、心置きなく死ね！」

しかし、彼らの喜びも東の間であった。

巨人は棍棒クラブを棄てると、メガ・プラタナスの落ち葉を思わせる掌を振り回し、肌を焼く炎を激しく叩いた。そして同時に何度か斜面を転がった。

呆れたことに、たったそれだけで火種は完全に消えてしまった。その肌は焼け焦げ、黒ずんだものの、命にも戦闘力にも異常はない。ただし髪が焼け、頭は丸坊主になっていた。

そして――エマルカは見た。相手の真の形相を。

モノアイ
単眼ではなかった。

左目だけは異様に大きい、髪に隠れていた右目は豆のように小さい。それは純粋な魔物ではなく、人の血が幾分か流れている証拠だ。

エマルカはすぐに真実に行き着いた。

「キュプロースではない。そなたはネフィリムか！　人と神の間に許されぬ産声をあげた、永遠に祝福されぬ孤児か！」

そして神々の設計図を乱雑に書き換えて誕生した超大型合成獣キメラニアンの再暴走が始まった。

「あるうううう……あるうううう……」

絶叫を發した相手は明らかに異変を来していた。総身に蒼白い光が浮き上がっている。まるで鬼火まどを纏っているかのようだ。

丸腰となった巨人だが、今度は長すぎる腕と足を武器とした。数秒だけ触れただけで兵士が火だるまとなり、焼死を義務づけられていく。

邪気と狂奔が同居する大小ふたつの瞳が、エマルカをまっすぐに睨んだ。進軍方向は1秒で変わった。巨人は彼女を標的としたのだ。

喉元まで飛び出しかけた悲鳴を呑み込んだ。逃げようにも相手の脚力は人間離れしている。とてもではないが脱出は無理だ。

いさぎよく自害して果てるか？　綺麗な身のまま死せば天国の門は開かれよう。

そんな最後の選択肢が頭を横切った時であった。

蹄の音が響いてきた。妙に不規則な調子だ。

やがて視界の隅に魔の馬が見えてきた。

8本足ならぬ7本足のドラゴン・スレイプニルだ。それに跨またがっているのは幼少時より一緒に修行し、また将来を約束したこともある男だった。

「エマ！ 無事か！」

— 6 —

イトン・アンシャルだった。

後陣軍団長補佐はエマルカの肢体を横からかっ攫^{さら}うと、そのままドラゴン・スレイプニルの背中に乗せ、退避運動に入る。

「来るのが遅すぎるわ。それから私のことは後陣軍団長と呼びなさい！」

安易に抱いてしまった安堵を振り払うため、エマルカはあえて厳しい口調で怒鳴った。

器用^{たづな}に手綱を操りながらイトンが返す。

「そう怒るな。馬が思ったより鈍足だったのだ。合成^{キメラニアン}獣とはいえ、負傷したままでの全力疾走は負荷が大きすぎた。いつも部下に能力以上の任務を強いているエマにならわかるだろう」

「口のききかたに気をつけよ。それが王位継承権第一位^{ひめみこ}の姫御子に対する物言いか」

「非常時だ。許してくれ。それに、どのみち小一時間もしないうちに、私と後陣軍団長の立場は大きく変化するのだから」

馬上で体勢を直しながらエマルカは答えた。

「なんの話かわからぬ。筋道をたてて話せ」

「詳しいことは退避された国王陛下に聞いてもらいたい。いま話せるのは昔の約束を守れる時が来たという事実だけだ。あの巨人を倒すという必要条件はあるがな」

頭の回転には自信のあるエマルカは、すぐ真相に気づいた。口約束が得意な叔父上が、またなにか吹き込んだに違いないと。

「待ちなさい。あの巨人はよほど高位の^{スピリッツ}精霊の祝福を受けているわ。無為無策でぶつかっても火傷するだけよ！」

「遠目からも見えた。相手に触ると同時に発火している。こちらの体温に干渉し、筋肉を熱膨張させているとみた。ならば触れずに倒せばよいだけの話。悪いが手綱^{たづな}を頼む！」

早口で言ったイトンは、^{あぶみ}鐙の上に立ち上がると、そのまま空へと跳躍した。

ドラゴン・スレイプニルの勢いも借りてはいたが、信じ難いまでの身の軽さであった。

狙うは間合いを詰めてくるネフィリムの二の腕だ。これまで無双状態だった巨人は、素手で挑んでくる相手に意表を突かれ、反応^{じゃっかん}が若干だが遅れた。

イトンはその機会を見逃さなかった。敵の肘^{ひじ}に的確に蹴りを入れた彼は、反動を利用して再び空中へと身を躍らせた。軍靴に鬼火が燃え移ったが、意に介していない様子だ。そのまま重力に逆らいつつ、中空で体躯をひねりながら半回転した。

そしてエマルカは目撃した。イトンは左手一本で、毛髪の大半を失ったネフィリムの頭上に舞い降りると、そのまま倒立したのだ。

もちろんネフィリムもすぐさま対応した。巨人は長すぎる右手を敏捷に動かし、邪魔者の腕を太い指先で挟み込んだ。

しかし……着火はしない。

心臓に優しくない光景を傍観していたエマルカだが、ようやくイートンの狙いが読めた。

推測が正しければ、ネフィリムの人体発火現象は熱を運びやすい筋肉か脂肪に効果を及ぼし、一気に着火点までもっていき荒技だ。

逆に言えば、筋肉も脂肪もない部分にはまったく反応しない。

そしてイートンの左手は10年前の悲劇以来、生身ではないのである。

「あるうううう……あるうううう……」

相手の肉体に引火しないという状況が受け入れ難かったのか、ネフィリムが悲しげな叫び声をあげた。暴れる獣の頭上で逆立ちしたまま、イートンは静かに言い放つ。

「哀れなる巨人よ。一撃で死を提供できぬ私をどうか責めないでくれ」

精悍なイートンは身軽さを誇示するかのように再び飛翔した。それも、2本の指先で掴まれている肘と手首を、ネフィリムの頭上に残したままでだ。

とはいえ体と左手を完全に切り離れたわけではない。肩口からは幅広で茶褐色の紐が伸びていた。それが着地に成功したイートンとの間を繋いでいる。

強化護謨^{ゴム}のロープだった。ペニンシュラ王領南部海岸にのみ生育するボンディの樹脂で精製されたそれは小型投石機^{パリスタ}の発射機構にも使われている。頑丈さは保証つきだ。

エマルカは驚かなかった。彼女はよく知っていたのだ。イートンが義手であることも、それに武器か道具を仕込んでいることも。

イートンは再び地面を蹴って跳躍した。護謨^{ゴム}の紐^{ひも}は蛇のようにうねると、ネフィリムの首を精確にとらえ、投げ輪^{なんじゅう}の要領で何重にも絡みついた。

頸部を狙う脅威に気づいたのか、ネフィリムは激しく上半身を振り回したが、伸縮する紐は絶対に切れない。逆に暴れば暴れるほど喉笛に絡みついていく。

「あるうううう……あるうう……ある……」

冥府から響いてくるかのような叫びは、やがて小さくなり、呻^{うめ}きに変わった。

醜悪かつ凶悪な狂戦士も哺乳類であることにはかわりはない。酸素呼吸が続かなければ数分で意識を失う。

ネフィリムは四肢を投げ出すと、山肌に地響きを奏でつつ、大の字に倒れ込んだ。象の死を連想させるに充分な最期^{さいご}であった。

すぐに兵士たちが周囲を取り囲み、刃の切っ先を向けようとした。誰もがトドメを刺す栄冠を欲したわけだが、エマルカはそれを制して言った。

「殺してはなりません。敗者の命を奪ってはメルシュの戒律を破ることになるのです！」

ネフィリムの首に凶太い護謨^{ゴム}の紐^{ひも}を巻き付けたままのイートンが、それに反論する。

「放置は許されなまい。この巨人が再びの災いをもたらさぬように手を打つのが、我らの務めではないか」

数秒間だけ考えたエマルカは、次善策を口にしたのだった。

「ならば手と足の腱を切りなさい。残りの生涯を地を這わせることによって、これまでの悪行を償わせるのです」

残酷な命令だが、戒律に反しないためには他に手が無い。兵士たちが駆け寄り、^{てつじょうもう}鉄条網に用いられる鋼鉄の銀糸でネフィリムの全身をがんじがらめにした。

足を折った軍馬を処分する際に用いられる牛刀が何本も運ばれてきた。それが巨人の手足に振り下ろされる瞬間だけはさすがに直視できなかった。半死半生のネフィリムが苦痛の悲鳴を発する余力を失っていたのが、せめてもの慰めだった。

呼吸を^{ととの}整え、抱いた衝撃をどうやら押し隠したエマルカに、横からイトンが言った。
「^{ディフォーミティ}半端物として、このような姿では生きていくのも辛いだろう。戦士と名誉ある死を賜るのが最善だと思うが」

「軍人としてはそれが正解だとしても、国政と国教に携わる者としては、意見を異にせざるをえない。こちらも捕虜をとられている以上、安易にこの者は殺せない。たとえこの戦争がザルツランド側の侵略で始まったものであったとしてもだ。

それに^{ディフォーミティ}半端物だとしても、生きてさえいれば役割を果たすことはできる。^{マギステルエクテス}賢聖騎士イトン・アンシャルよ。貴官は先ほどそれを自らの行動で実証したではないか」

複雑な表情を示したあと、後陣軍団長補佐は言った。

「エマ。あなたは本当に美しく、そして恐ろしい女性だ。その夫たるべき者は生半可な者では務まるまい。私にも覚悟が必要だろうが、考えている間に決意が鈍るのは困りもの。こうした場面では勢いを優先すべきだろうしな」

「イトン。さっきから発言がおかしいぞ。なにが言いたい？」

「メルシュの戒律は盟約の破棄を厳しく戒めている。そして国王陛下ラガール2世は、名目上とはいえ、神々の代理人たる役割を果たす模範的信徒のはず。その姪たる君に拒否権など最初からないのだ」

彼は生身の右腕でエマルカを引き寄せ、こう告げたのだった。

「今日ほど君の手によって^{ディフォーミティ}半端物とされたことを幸運に感じたことはないぞ。これから生涯を通じ、ともにメルシュの神を永遠に称えようではないか。

エマルカ。我が妻たるべき女よ。運命を現実に変える時がきたのだ」

4 失意の英雄

— 1 —

ペニンシュラ王領の首都は国境から馬で7日かかる場所に設けられていた。

その名をオリエタスという。人口19万を数える湾港都市だ。

過去何度か遷都^{せんと}は行われていたが、半島国家の常として首都は常に海沿いに置かれていた。

海運を制する者は経済を制する。そして経済を制する者は世界を征する。ペニンシュラ王領は国庫に貯め込んだ金貨にものをいわせ、周辺国を経済的に支配していた。

必然的に軍備は縮小されていく。侵略の可能性は潰えたと判断されたのだ。殺生と破壊だけを目的とする軍隊など、どうして拡張する必要があるだろう？

平和を買うという行為に慣れたペニンシュラ王領の民^{たみ}は、いつしか騎士階級や軍人に対する敬意を忘却していた。むしろ暴力に生きる粗野な人間だと蔑^{さげす}む風潮さえあった。

だからこそ北の梟敵^{きょうてき} ザルツランド帝国が侵攻の素振りを示したとき、特権階級^{セレブニスト}の者たちは用心棒を連れて街を抜けだし、海路で南へ向かった。事前に移動禁止令が発布されていたが、やはり命あつての物種である。

続いて中産階級が徒歩や馬で脱出し、街には貧民だけが取り残された。

自暴自棄になった人々は夜盗へと身を襲^{やつ}し、やがて官憲も力と情熱を失い、都市機能は崩壊した。オリエタスは驚くほど早く廃墟都邑^{ゴーストタウン}と化していった。

敗北を前提とした行動だったが、最前線からもたらされたのは意外にも吉報であった。国王直率の軍勢はザルツランド侵攻軍をさんざんに撃ち破ったらしい。

こうなれば現金なものである。特権階級^{セレブニスト}は大急ぎでオリエタスへ戻り、私財を投じて無法者の排除に務めた。私兵を数百人単位^{やと}で備っている彼らにとって、治安の回復などその気になれば簡単な話であった。

復興利権を睨んでの行動だったが、凱旋したラガール2世^{ちり}は塵一つ落ちていないオリエタスを検分し、富裕層の行動を称賛した。

首都を勝手に逃げ出した者を裁こうとする動きもあつたが、戦勝の前にすべては忘れ去られていった。特権階級^{セレブニスト}は結託し、後ろめたさを覆い隠すかのように私財を投じると、勝利を祝う大祭を開催した。

らんちき騒ぎが連日連夜行われた。とりあえずの命を確保できた人々は、喜色の感情を爆発

させ、生を謳歌した。

酒と歌と踊りでオリエタスは満たされた。そして狂乱の首都では、^{しんしょうひつぱつ}信賞必罰 という国家を支える鉄則が失われようとしていたのである……。

— 2 —

帰着した初日は自粛した。

金持ち連中が企画した凱旋式典が行われる手筈になっており、陳情を述べるには時期が悪いと判断したためだった。

そして3日待った。なんの音沙汰もなかった。

無理もないか。イートンは最初そう思った。国王陛下は祝賀会で多忙を極めておられるのだから。

面倒なのは日和見主義の南部都市国家群からやってきた数十人の使者だ。戦勝祝いは名目にすぎず、高騰を始めている戦時国債の大量購入が登京の目的だった。俗物の集団だが、国家指導者としては無視もできないのだろう。

さらに3日待った。やっと行賞の発表が行われるようになったが、王宮からの呼び出し命令はイートンの手元には届かなかった。

最大の功労者たる自分は真打ちなのだ。ならば最後に回されても仕方ない。そう思い込んで自分を納得させるイートンだったが、気になる事実もあった。

戦地に赴いた武官ではなく、銃後の守りを固めていた文官ばかりに恩賞が、それも莫大な額の褒美が賜与しよされている現実だった。実質的になにもしなかった護民統領や内務丞相といった政府高官の加俸が次々に公布されるいっぽう、軍関係者への褒賞は皆無だった。意図的に無視されているかのようだ。

事ことここに至り、気の長いイートンも焦しれてきた。国王陛下はいったいなにを考えておられるのだ？ 彼は面謁めんえつの申込書を王宮へと運ばせた。

返事が来たのは2日後であり、謁見が許されたのはさらに5日後の夜であった……。

— 3 —

「おお、来たか。^{マジステルエクテス}賢聖騎士イートン・アンシャルよ！ 対ザルツランド戦役における最大の殊勲者よ！」

トマソン・ラガール2世は玉座から身を乗り出すようにしてイートンを迎えた。

そこは^{エウリアンゼ}異邦人の間、と呼ばれる謁見室だった。王宮には^{あししげ}足繁く通っているイートンだが、この部屋は初めてであった。

国家元首が英雄を迎えるにしては狭すぎる。壁も必要以上に厚く、窓さえない。高すぎる天井には^{スピリッツ}精霊の力を拝借した電飾がいくつも下げられており、日没後だというのに昼間のように明るかった。

しかし圧迫感はない。たしかに狭隘な空間だが、そこにいるのは王とイートンだけだ。謁見には欠かせない衛士はおろか、速記者さえいない。

イートンは察しがよすぎる自分を呪うのだった。

(……国王陛下は記録に残せない要件を語るため、私をここに招き入れたのだ。それはあまり面白くない話に違いあるまい……)

^{うれ}憂いが顔に出ないように注意するイートンに、ラガール2世はなおも称賛の言葉を重ねる。

「まず最初に謝らねばならぬ。お前を2週間も放置してしまい、心苦しく思っておる。雑事に追われ、時間を割いてやれなかった余をどうか許せ。

言い訳にしか聞こえぬかもしれぬだろうが、戦後処理とは本当に面倒なのだよ。

旗幟を鮮明にしなかった都市国家には忠誠を誓わせねばならぬし、首都を留守にしている間に^{センターズ}中道派が勢力を伸ばしてな。連中の首根っこを押さえつける必要があったのだ。

連中はしよせん他人。^{きんす}金子と地位を保証してやらなければふて腐れる。だからこそ身内同然の軍部への恩賞は後回しにするしかなかったのだ」

為政者の言い訳はみっともないが、王には王の事情があるのだろう。イートンはそう考え、沸き起こる疑念をねじ伏せようとした。

(……軍が身内？ 悪い冗談だ。たしかに国王に忠誠を誓う者は多いが、それは表向きの話。ここ数年の国防費削減で悪意を抱く者はかなりいる。それを自覚しているからこそ、王自らが最前線まで足を運ばなければならなかったのに……)

慎重に台詞を選びながら、イートンは言った。

「勝利こそ軍人にとって最大の褒賞。現に^{ぼくしゃ}幕舎には褒美が遅いと嘆く声など、いっさい流れておりませぬ。これも陛下の御仁徳でございましょう」

問題を複雑にしないための^{せじ}世辞だが、ラガール2世は知ってか知らずか、まんざらでもない

といった調子で笑みを示した。

「余は切望せざるを得ない。軍人全員がそなたのように分別があればよいのだがと。よかろう。

マジステルエクセス

賢聖騎士イートン・アンシャルよ。余もそなたの忠節に報いようぞ」

「ありがたき幸せにございます」

「そなたは軍人という役職にのみ納まる器ではない。ゆくゆくは国政にも参加してもらわねばならん。だからこそ、まだ若いそなたに素晴らしい経験を積ませてやろう。

いっかど

一廉の人物とみなされるには領地が必須だ。まずはそれを用意せねばな。オリエタスの東南200マイルにあるテスエリットをそなたにやろう」

「陛下、お待ちを。その地ならば私も存じております。山麓に位置する風光明媚な里ですが、30年前の雪崩で住民が全滅して以来、廃村になっていたはずです」

「そのとおりだ。しかし最近になってテスエリットを復興させようとする動きがあつてな。

あの街は打ち棄てておくにはあまりに惜しい。知っていよう。以前、鉄鉱石の坑道から発掘兵器が何台か見つかったこともあるからのう」

「私にその調査をせよと命ぜられるのですか？」

「失われた文明の遺産に日の目を当てるのは現在に生きる我々の義務であろうが」

「しかし一人では無理な案件です」

「案ずるな。再入植は始まっておる。住民は約300人。着任と同時に、その全員がそなたを神と崇めるだろう」

王の発言の意味するところを看破したイートンは言った。

スキャボニ

「自由奴隷を集団で送り込んだと見ました。それも私の名前で……」

「察しのよい相手とは話していて楽しいものだ。連中はそなたの手足となって働くであろう。

イートンよ。余の代理として早々にテスエリットへと出向き、治安を確立せよ。3年後には税収を期待しているぞ。

フューダルド

今後はこう名乗るがよい。テスエリット 牧宰 イートン・アンシャルとな」

魅惑的すぎる申し出だった。王の意志は明らかだ。これだけの恩賞を与えるのだから、例の件はどうか忘れてくれと遠回しに言っているのだ。

「御命令とあればどこにでも参りますが、テスエリットはあまりにも僻地。一人では寂しさに負けてしまう危惧がございます。

はんりよ

どうか伴侶の同行をお許しいただきたい。あの日あの時の御約束を国王陛下が失念なさっておられぬことを、家臣イートンは期待するのみでございます」

それまで立ち上がったまま言葉を繋いでいたラガール2世は、不意に無表情を決め込むと、豪華なマントを翻し、背中を見せた。

クロスピース

そこには数珠十字が刺繍されていた。

普通の十字架にもう1本横棒を加え、真円の連珠をあしらったメルシュ教のシンボルマークである。神々の代理人たる国王が背負う紋章だが、初老を迎えたラガール2世には、重すぎる様子であった。

玉座に座り直した国王は、頭上に乗せた王冠を鈍く煌めかせながら、
「どうやら余は見込み違いをしていたらしいな。そなたが帰国から一週間も謁見の申し込みをしなかったのは、姪との婚姻を辞退するという遠回しな意思表示だと解釈していたぞ。

おお、イートンよ。^{フューダルド} 牧宰 イートン・アンシャルよ。そなたは余を^{たばか} 謀っていたな。左手を失っていた事実を^{なにゆえ} 何故に^{いんべい} 隠蔽したのだ？」

言えるわけがなかった。

メルシュ教の指針を国策に取り入れているペニンシュラ王領では、肉体的な^{ハンディキャップ} 瑕疵条件を余儀なくされた者には手厚い保護が約束されている。

それは納税や勤労からの解放を意味していた。当然、戦争に出向く義務も資格も消滅する。もし左手を失った者を前線に送った事実が知れば、国王といえども強く非難されよう。

「……^{ゴム} 護謨の紐^{ひも}を使った仕掛けを準備していた点から判断するに、かなり昔に失われたようであるな。子供の頃か？ だとすればずいぶん長い間、隠し通したものだ。

いや、白状はせずともよい。察しはつく。そなたは誰かを^{かば} 庇おうとしておったに相違ない。それが如何なる人物かは自明の理であろうよ。余の情報網をすり抜けるほどだ。侍従連中にも顔が^{いか} 利く、かなり高貴な生まれの者であろうな」

沈黙でそれを肯定したイートンに、ラガール2世はなおも詰問を投げかける。

「国家元首を^{だま} 騙すのは罪ではないか。そなたの戦功に免じ水に流すことも考えたが、あくまで姪を欲するというのであれば話は別だ」

「^{せんえつ} 僭越ながら申し上げます。国王陛下は私と約束なされたはずです。^{モノアイ} 単眼の巨人を打ち倒せばエマルカ・ダークナスを与えると。

盟約の破棄はメルシュ教の理念に反します。神々の代理たる国王陛下が、まさかそのような愚挙には及ぶはずもない。そう私は確信しております」

「そのとおり。対国家でも対個人でも誓約は絶対。メルシュ教の第一信徒たる余がそれを自ら破れば、国民の間にようやく芽生えた道徳は崩壊しよう。

しかしだ。そなたから破棄してくれたならば問題は一気に解決するではないか。

イートン・アンシャルよ。エマルカとの婚姻をあきらめてはくれぬかな？ もちろん代価は用意するぞ。

一生かかっても使い切れぬ金銀を与えよう。どんな美女でも添い遂げるように余が口を利いてやろう。^{フューダルド} 牧宰 ^{くらい} の位は世襲としよう。国家英雄という称号を新たに設け、そなたの功績をペニンシュラ王領の国史に永久に刻もう」

「身にあまる光栄ですが、私が欲するのはエマルカ様ただ一人なのです」

「再考の余地はないか？」

「ございませぬ。国王陛下が我意を通されるには、私に自害を命ぜられるしかないかと」

まっすぐなイートンの視線を受け止めきれず、ラガール2世は目を伏せた。その口髭の先が戸惑いと侮辱で震えている。

「そしてゆくゆくは己が国王の位に登りつめる気であろうが。そうはいかぬ。この国は我が子ミ

ノンに継がせるのだからな。

我意を通すことしか知らぬ愚か者め。イートンよ。そなたに破滅的な処分を科さねばならぬ余
の ^{しんちゆう}心中 を察するがよい。 ^{へんりん} 勇気と理性の片鱗 が残っているならついてまいれ」

立ち上がったラガール2世は、イートンに後ろを見せて歩き始めた。

その背中はあまりにも小さかった。ペニンシュラ王領という大国を切り盛りしている傑物だとはとても思えないほどに。

(.....こんな器量なき ^{しょうじん}小人 に運命が握られているとはな。私は生まれてくるのがあまりにも遅すぎた。10年早く生を受けていたなら、理不尽な男を王として仰ぐこともなかった.....)

— 4 —

^{エウリアンゼ}
異邦人の間を抜け、狭苦しい通路をすぎると、新たな、そして異様な空間があった。
無骨な石造りの壁が圧迫感を与える暗い部屋だ。

その中央には、王宮に似つかわしくない物体があった。四肢を拘束する革の錠が準備された無
気味な寝椅子だ。

手術台ではない。拷問台だった。

先ほどの異邦人の間には外国の特使が通されていたはずだ。^{スパイ} 諜報員に等しい彼らから情報を引
き出すため、ここは活用されていたのだろう。絶命した者も少なくないはずだ。

待ち構えていた3人の衛兵が、^{うやうや} 恭しく、それでいて有無を言わせぬ調子でイトンの肩を捕
まえた。

逆らうような真似はしなかった。剣闘士にさえ転職可能な連中の腕力に^{かな} 敵うわけもないし、こ
こまで来ればじたばたしても始まらぬ。

そう覚悟を決めたイトンは自ら拷問台へと登り、手足を固定せよと衛兵に告げた。

思わぬ意思表示に国王はたじろぎながら、なお冷徹に宣言するのだった。

「命は取らぬ。だが右腕と未練を断つ。女を抱く腕を2本とも失ったならば、強情なそなたであ
ってもあきらめがつくだろう。

両手を切断するのは辛かろうが、これもすべてそなたの^{じま} 自儘が呼んだ結果。現実を受け入れる
しかあるまい。

そして余は慈悲深さを^{くにじゅう} 國中に示すのだ。戦場で手傷を負い、哀れにも^{ディフォーミティ} 半端物となつて
しまったイトン・アンシャルに対し、国家としてできるだけの補償を行うと。

案ずることはない。テスエリット^{フューダルド} 牧宰の地位は保証しよう。食事や^{しも} 下の世話は300人の
奴隷に任せばよい。時が経てば腕をなくした事実さえ忘却できる。

そうじゃ。報告書に面白い記述をががあった。発掘兵器の中に最上級の義手があったと。あれも
つけてやろう」

権力者としての^{しぎやくせい} 嗜虐性に火をつけられたのか、ラガール2世は^ね 睨めるような瞳を向けた。
「鍛え抜かれた太くたくましい腕じゃ。やはり剣の達人を呼んでおいて正解であった。下手が刀
を振るえば、一撃で切断できず、悲惨な事故が起こるからのう。入ってくるがよい」

ドアが開き、衛兵が退出するのと同時に、新たな人影が接近してきた。

王の言葉に促された男の顔を見たとき、イトンは思わずうめいた。忘れようとしても忘れら
れない相手だった。

「ターガリオン・モイス殿……」

^{カンバック}

先陣軍団長だ。イートンの蘇生術^{ソウセイジュツ}でかろうじて生を許されたモイスは、サーベルタイガーの首でも落とせそうな刃鎗^{ヴェウジエ}を握りしめていた。

「賢聖騎士^{マギステルエクテス}イートン。頼む。どうか国王陛下にお詫びしてくれ。君命であっても、俺は命の恩人にこんなことはしたくない……」

国王の狙いに気づいたイートンは、首をねじ曲げてラガール2世を睨んだ。

「私は忠誠を誓う相手を間違えたようです。まさか陛下がここまで非道でおられるとは思ってもみませんでした。

我が戦友にこんな役目を押しつけるとは。御自身の面子^{メンツ}を保つため、いったい何人の部下を犠牲になさるおつもりですか！」

ラガール2世は背を向けたまま答える。

「交渉の秘訣を教えてやろうか。相手に拒否できぬよう万全の手を打ってから、こちらの条件を突きつけるのだ。

イートンよ。そなたも朋友^{ほうゆう}たるモイスに後味の悪い思いをさせたくはあるまい。今ならまだ運命を変えられるぞ。

小娘一人をあきらめるだけで誰もが救われるのだ。身の丈を考え、わきまえるがよかろう。すべてはそなたの思惑ひとつに懸かっておる。

考えてもみよ。半端物^{ディフォーミティ}に姪をくれてやる男など、このペニンシュラ王領にいようか。いるはずもあるまい」

翻意を示すのは簡単だった。首を縦に振ればよいだけだ。

だがイートンにとって、それは無理な相談であった。エマルカ・ダークナスの艶姿^{あですがた まぶた}が目蓋の裏に焼き付いていたからだ。

幼少時からの憧れである完璧な女性を手にする機会を逃したくはなかった。ここで引けばあの笑顔を永遠に手放さなければならない。それは右腕を手放すことよりも痛かった。

「私には賢聖騎士^{マギステルエクテス}としての矜持と名声があります。国王陛下が私を懲罰に付するといふのであれば、我が身は愚かなる王が存在したという消しがたい物的証拠となりましょう」

損得だけを判断材料としてきたラガール2世には、こっちの覚悟など理解できまい。暗愚な凡夫にしか映らなくなったイートンをどうするかは、簡単に想像できた。

そしてラガール2世は、苦すぎる命令を下したのである。

「ならば仕方がない。ターガリオン・モイスよ。軍法^{ただ}を正せ。この者に、長年にわたり国王を欺いていた罪を償わせよ」

モイスは震える足取りで近づいてきた。その表情は夜明け前の湖面を連想させるまでに青ざめている。涙腺は決壊する一歩前だ。

それでも気丈な声でモイスは言い切った。

「……謹んで君命に従います」

「聞いたかね。暴戾^{ぼうれい}に近い支持にさえ 肅々^{しゆくしゆく}と従う彼こそ、真の君臣であろうよ。

モイスよ。余はそなたにまだ褒美を授けていなかったな。まずは防衛将軍に抜擢し、国軍の半

数を任せよう。キュクロースだがネフィリムだか知らぬが、あの巨人を捕縛した功績には大なるものがあったぞ。

ザルツランドから使者が来ておる。^{ほうかつ}包括的和平にむけて話し合いがしたいとのことだ。身代金を払うから、あの巨人を返せと言っておる。これで法外な賠償金をせしめられよう」

「国王陛下。ネフィリムを倒した功績者はイートン殿でございますが.....」

「敵に情けをかけ、半死半生で放置した者に栄冠は似つかわしくない。捕縛に成功したそなたこそ勲功が認められるべきだ。

そうだ。ゆくゆくはエマルカもくれてやろう。強情な^{ディフォーミティ}半端物よりも格段に素晴らしい婿となろうからな」

その直後、野獣の咆哮があたりに響いた。

「おあううう！ おあううう！」

ターガリオン・モイスだった。彼は鋭い刃^{ヴォウジェ}鈍槍の切っ先を自らの右胸に押し当て、そのまま全体重をかけたのだ。

血液の臭いが室内に充満し、床がどす黒く染まっていく。息も絶え絶えになりながら、モイスは口から言葉をつないでいった。

「.....イートン殿。私も仕える主を間違えた。貴殿が再起動してくれた心臓を、貴殿のために止められたことを誇りに思っている.....」

自らの手で自らを串刺しにした勇敢すぎる先陣軍団長を悼みながら、イートンは言い放つ。

「国王ラガール2世よ。貴様はかけがえのない忠臣を自害に追いやった卑劣漢である。自らの発言と行為を恥じるなら、即座に王冠を脱ぎ、エマルカ様に王位を譲れ！」

しばし絶句していたラガール2世だが、彼はわざとらしい咳払いをしてから、

「余は不忠の輩に囲まれていたようだ。^{ちなまぐさ}血生臭い座興などにつきあっているか」

と吐き捨て、出口へと向かった。

しかし退場は許されなかった。そこには女傑が立ち塞がっていたのである。

「それは敵前逃亡ですわ。国王陛下」

— 5 —

エマルカ・ダークナスだった。やけに露出部の多い乳白色の夜会服をまとった彼女は、貴人としての自己を過度に主張しているかのようだった。

「どうか自分の発言の結果には責任をおとりくださいませ。まずはその^{まなこ}眼で、自らが黄泉へと追いやった男の顔をよくご覧になるべきですわ」

姪の様子に奇異なものを読み取ったラガール2世は、震える声で語りかけるのが精いっぱいであった。

「エマルカよ。言葉は選ぶがよい。機嫌の悪い余には^{ふけいざい}不敬罪に聞こえてならぬぞ」

「敬う気持ちなど潰えましたわ。私は待っていたのです。このドアから3人の男が無事に出て来る瞬間を。」

でも、それは叶わぬ夢と消えました。傷つき、命を落とした戦士を残し、一人で退出なさろうとする陛下を見て、決意が固まりましたの」

背筋を伸ばし直してから、エマルカは宣言した。

「私は現在の国王を^{しい たてまつ}弑し奉り、その後任の座に坐る。叔父上が我が父を亡き者とし、その位を^{さんだつ}篡奪したように！」

ラガール2世は老いた顔を凍りつかせた。狼狽したその表情は兄殺しの犯行をで自供したも同じだった。

そしてエマルカは小気味よい^{マジカ・アリア}魔術詠唱を始めるのだった。ラガール2世をさらなる過冷却の^{るつぼ}坩堝に放り込むためであった。

「……温冷のすべてを^{スピリッツ}操る精霊アウレメンツに今いちど願う。我が父上の命を奪った国王に^{てんちゆう}天誅を。叔父上の汚れきった心ならびに疲弊した心臓を永久に凍りつかせ、正義を尊ぶ汝の名を天下に示すがよい！」

トマソン・ラガール2世の全身は一瞬で^{もや}靄に包まれた。それが消え果てたとき、国王の体は蒼白く光る氷柱に姿を変えていた。

驚愕の表情のまま凝結した叔父の遺体を確認しつつ、エマルカは言い放つ。

「絶命まで一秒かからなかったか。積み重ねた罪を思うなら、こんな死に^{かた}方では叔父上が幸せすぎる気もするが、あまり強欲になるのも考えものだ」

それまで傍観を余儀なくされていたイトンは、弾む声で問いかけた。

「エマ。私は生涯感謝する。完全なる^{ディフォーミティ}半端物になる窮地を救ってくれたことに。すぐ拘束錠を外してくれ。前国王陛下とモイス殿の^{なきがら}亡骸を始末しなければ。国民へどう言い繕うかも考えなければなるまいし……」

そこでイートンは言葉を打ち切った。エマルカはモイスの遺体に近づき、胸を貫いた刃鉾槍を抜こうとしているではないか。

「……いったい何をしているのだ!?!」

マジステルエクテス

「賢聖騎士イートンに命じる。私のことは以後、女王陛下と呼ぶように」

冷たい調子でエマルカは語り続けた。

「前王は御命令を取り消す前に身罷みまかられた。ターガリオン・モイスも死亡した現在、この場で最高位にある私には、それを決行する義務がある」

血塗れの得物から滴ちまみり落ちた真したたっ赤な汚汁がドレスを汚す。刃鉾槍ヴォウジェを手にとったエマルカは恐ろしくも美しかった。

イートンは生唾を呑み込み、問い糾す。

「何のためにだ？」

「お前が永遠に私を憎み続けるように」

「言っている意味が理解できない」

「理解する必要などない。私はお前と結婚はできない。その現実を心と体に刻みつける。ただそれだけの話」

「女王陛下。ならば一つだけ真実をお聞かせ下さいませ。どうして私とは結婚できないと断言なさるのですか。恐れながら私は最高ならずとも最良の夫となり、女王陛下が民たみを導く手助けができるものと確信しておりますのに」

空恐ろしいまでの淀よどみなさでエマルカは返事を口にした。

「では言おう。イートン・アンシャルという個人があまりに純粹すぎる存在だからだ。

国政とは鬼道そのもの。そなたの繊細すぎる性根ではとても現実に耐えきれまい。折り合いをつけることを知らぬその精神は早晩そうばん壊れてしまうだろう。ペニンシュラ王領という我が祖国を道連れにしてな。

修羅の道を征くのは私ひとりでよい。私はペニンシュラ王領そのものと結婚する。ペニンシュラの修羅として……」

細い腕で凶器をかかえ、イートンの右腕に歩み寄りながら、エマルカは言った。

「脅えた素振りを見せないのだな。強情な男だ。せめて泣き叫べば、私の心も迷いに揺れ動くかも知れないのに」

「私はすでに女王陛下のせいで左腕をなくしているのです。経験ずみの悪夢を繰り返すことに忌避感など抱きはしません」

その言葉は、現実主義者へと成長を強いられたエマルカの心に深々と突き刺さったらしい。彼女は身を切られたかのような苦渋の表情を浮かべると、どうにか言葉を続けた。

「……私のことを憎むがよい。そして呪うがよい。負の感情のすべてを受け止めよう。それが叔父を殺し、愛する者の両腕を切断した女が受けるべき罰だ」

イートンはその時点で初めて恐怖心を抱くのだった。

正直に言えば、彼はこの瞬間まで脅しだと思っていた。エマルカは、こちらの覚悟を試してい

るだけだと。たとえ脳裏で正と邪がせめぎ合っていたとしても、刃を振り下ろすまでに至ることはない。

だが、そうではなかった。

1歳年上のエマルカ・ダークナスは、非情さを剣として生きていく決心をしていたのだ。実父を毒殺された仇討ちだとはいえ、叔父を亡き者にした少女である。憂いはあっても迷いはなかった。

暴風のような空気の濁流を右腕に感じた直後、違和感が走った。

痛くはなかった。

ただ重みと冷たさを感じただけであった。

その夜――。

エマルカ・ダークナスは、前王の不慮の事故死にともない、正統な権利のもとペニンシュラ王領第18代王位に即位したことを宣言した。

同時にテスエリット^{フューダルド} 牧宰^{フューダルド}としてイートン・アンシャルが着任することも発表された。

国民は、無味乾燥な、それでいて爆弾発言に近い政府公報を冷静に受け入れた。

彼らにしてみれば、外敵を追い払えた以上、国王や女王など誰でもよかったのだ。ましてや僻地^{へきち}の^{フューダルド} 牧宰^{フューダルド}にどんな人物が就任しようと、興味を抱く者はいなかった。

そして^{みつろう} 蜜蠟^{みつろう}のような時間が重苦しく流れていった。

運命の輪廻^{りんね}が流転^{りんね}を始めるまで、それから3年もの歳月が必要だった……。

(電撃文庫『ペニンシュラの修羅』に続く)

ご注意

本作はアスキー・メディアワークス社より2012年9月に発売された電撃文庫『ペニンシュラの修羅』の前日談です。この後の物語は本編にてお楽しみ下さい。全国書店およびAmazon.comなどで好評発売中です。

<http://www.amazon.co.jp/dp/4048869817>

この電子書籍を著者に無断で複製、転載、出版すること、および有償無償に関わらず、このデータを第三者に譲渡する行為を禁止します。個人利用以外の目的での複製などは法律により禁止されております。

奥付

バトルシップ・ノベルズBN-000

ペニンシュラの修羅外伝

E P I S O D E Z E R O

— 3年前の敗戦 —

平成二四年一月三〇日 電子書籍版発行

著者 吉田親司 <http://www.chikashi.com>

(C) Chikashi Yoshida 2012